



院長 須藤 英仁

# 新病院開設に向けて

皆様明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひ致します。今年、病院にとりまして大きな飛躍の年となります。新病棟の建築も順調に進んでおり、1月1日現在、ほぼ躯体が完成し、外壁工事・内装工事に移っております。昨年のオアシス50号で掲載しましたように、IT化を進める予定です。IT化というのは、色々な情報伝達がはつきりするとうい利点がありますが、利用する人間からすると不便な点もでてきます。患者さんには今の病院時点から少しずつ慣れていただくため、外来で色々な試みをさせていただいております。ここでそのいくつかを紹介させていただきます。

須藤病院に初めてかかる方（初診）、またこれまでかかっていた

が病状の変化があり他の病気でかかりたい方などは、看護師による初診受付を行っております。これは電子カルテに移行した際、患者さんの情報がすばやく医師に伝達されること、どの診療科で診察するのがよいのか、また空いている診療科はどこか、などの判断ができます。患者さんを待たせない試みの一つです。

次に不便になる点をお知らせ致します。これまでは診察が終わってから、湿布の薬を出して欲しい、また逆に医師の方が患者さんから、湿布を出して欲しいと言われたのを忘れてしまい、あわてて追加したなどのことがよくあったと思います。

これまでは人間の手で処方箋・カルテに記載さえすればすぐに修正

できたのですが、これからは相手がコンピュータです。診察後にこのような簡単に修正はききません。訂正する際は、一から電子カルテを立ち上げ直し、全ての部分を修正し改めていかないと、薬が出せなくなってしまいます。診察する医師はもちろんのこと、患者さんにもこの点の協力をしてもらわなければなりません。つまり患者さんはもし“薬が余っていて今回この薬だけはいらぬ”などということを確認に医師に伝えなければならぬという事です。医師も毎回の診察で、この確認作業が必要となります。逆に言えば診療が正確に行われるための方法と考え、医師と患者さんで一緒に作り上げていく方法と考えていただければ幸いです。また、“今回は都合で薬だけ出して欲しい”という患者さんもいらっしゃいます。これまでは人間の手で処理していたので、急いでいる場合はすぐに処方することもできました。今後はこれらにつきましても、正確を期すために翌日渡しとなりますので御

了承下さい。以上IT化にともなう、不便なこともお話させて頂きましたが、レントゲン等の画像診断につきましても、フィルムがほとんど不要となります。撮影後すぐに診察室に画像が転送されTVモニターに写し出されます。今までの写真の現像・受け渡し時間の省略が計れ、更なるスピードアップが期待されます。何はともあれ、建物は着々と完成が近づいておりますが、『これらの運用は病院スタッフと患者さんの共同作業により、正確な診療体制が出来る』ということを改めて認識いただき、新年のご挨拶とさせていただきます。



航空写真 (H19. 12. 27撮影)

# 新病院開設に向けて ～外来準備編～

皆様、明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。外来師長 田島です。今年、新病院が開院するにあたって、昨年より外来では以下の記載を行い、新病院でも親切な対応が行われるように準備を始めました。

## ①患者様に自分で血圧測定を行ってもらっています。

「今まで、看護師が測ってくれていたのに、親切じゃなくなった！」と思われるかもしれませんが、新病院で今まで通りの「紙のカルテ」ではなく、コンピュータを使用した「電子カルテ」というものになります。現状は、血圧測定した数値を紙のカルテに看護師が記載できていましたが、電子カルテになると医師が記載することとなり、診察前に患者様が血圧測定を行っていただくと診察がスムーズに行えます。しかし、病院へ来院されてすぐに血圧測定をしてしまうと測定値が高くなってしまいますので、受付を行って少し体を休めてから測定したほうが良いです。



血圧測定コーナー

## ②問診の仕方を改善しています。

今までは患者様が「問診票」を記入していました。須藤病院に初めて受信される患者様、または須藤病院に通院されている患者様が、他の科に受診する場合には、「問診コーナー」で患者様の症状を看護師

がうかがいます。この方法を取り入れたのは、患者様がどれだけ症状が強いのか、また、患者様の症状を事前にうかがうことで「その症状に適した科」を看護師が判断でき、診察前に電子カルテに記入することで、医師にも患者様の状態が素早く伝わります。実際に問診を看護師が行っていると、患者様より「安心して話せる。」と、という言葉も聞かれます。



問診コーナー

## ③トランシーバーを使い始めました。

新病院では、患者様もいろいろなことが初めてとなります。そのため患者様の不安感が強くなるように病院職員が患者様の待合、患者様の近くにいられるようにします。そのため広い病院内を一人の職員を探すのは大変なこととなり、職員間の連絡は手軽なトランシーバーを使用しています。スタッフが一人で話しているところを見てもビックリしないでください。

以上、3つの項目が外来で新しく始めたことです。

新病院も着々と完成に向かっていく中で、私たち職員も新病院に負けないくらいの努力が必要となり、日々進歩していかなくてはなりません。これからも患者様に新病院に向けての準備として、十分な医療・看護が提供できるように「新しい事」を始められるかもしれませんがどうぞご協力をお願いします。

患者様に親切で笑顔な対応を十分に行ってまいります。もし、患者様で「気づいた事」がありましたら、遠慮しないで職員に声をかけてください。



# 新年のご挨拶

事務長 山口彦次

新年明けましておめでとうございます。私は去年、年明け早々に骨折をしました。原因は銀行へ行った帰り、そこの駐車場と歩道にあった、たった数センチの段差で右足を捻ったためでした。激痛をこらえ病院に戻って、受傷した足を見ると右足の外側、小指と踵の間くらいが腫れ上がっていました。直ぐに整形外科（柳澤治先生）を受診し、右第五中足骨骨折という傷病名をいただきました。いわゆる「下駄骨折」というもので、下駄を履いていて捻ったときによくやる骨折だということでした。捻挫程度に考えていたのですが、骨折とは…。自分がいつまでも若くないということを実感させられたと同時に、このときほど病院に勤めていて良かったと思ったことはありませんでした。感謝！完治するのに半年以上もかかりました。着替えから始まり歩行、特に段差や階段の上り下りなど、

今までなんでもなくしていた動作が思うようにできなくなり、また周囲にも迷惑をかけてしまいました。その中で暖かい手を差し伸べて下さった方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

私自身、去年の年明けはこんな形で始まりましたが、病院にとっては新病院の建設が始まったこと、常勤医として石田常博・長澤武志両医師をお迎えできたこと、一般病棟が7対1看護という一番上の看護体制が取れたこと等々、明るい話題が沢山ありました。本年も引き続きいい年であるように願いたいものです。新病院も6月頃のオープンに向けて着々と準備が進んでおります。しかし機械や設備が良くなること以前に、スタッフがよくなければ何にもならないと思います。私は、骨折したときに暖かく差し伸べてもらった手の温もりを、今度は患者さんにお返しするようなつもりで取り組んで行きたいと思います。かかってよかったなど思われる病院を目指してスタッフ一同頑張りますのでよろしくお願いいたします。

## 老健めぐみ通信 『レクリエーション』

一般棟に入所している利用者様に家庭的な雰囲気味わってもらおうレクリエーションとして、昼食に「とん汁」を作って食べて頂きました。

包丁にて野菜の皮を剥き、食べやすい大きさに切る動作を見ていて思わず、「上手だね～」という言葉が出てしまいました。すると利用者様より「何年やってたと思っているんだい」と笑顔で言われました。いつもは物静かで自ら行動する事が少ない利用者様にごぼうと包丁を差し出すと自ら「笹がけ」で切ってくれました。作業を見守りしている時、いつもとは違う利用者様の表情や笑顔が見られました。とん汁は

誰一人怪我する事もなく美味しく出来上がりました。職員が片づけをしている時に利用者様より「何十年振りに包丁を持ったよ」「楽しかったよ」「またやりたいなあ」「今度はおきりこみが食べたいなあ～」など色々な声を掛けてもらった事で行う前の不安（包丁を持って行うので怪我の危険性が高い）が解消されとん汁作りを行って良かったという達成感に変わりました。今後は一般棟の入所者様だけではなく認知症専門棟や通所リハビリの利用者様とも楽しく家庭的な雰囲気を提供していけるレクリエーションを企画し実施していきたいと思っております。